



## 追悼抄

10月

## 「平和利用」熱く追求

原子力の安全に尽力  
田島 英二さん

(10月10日死去、85歳)

△思えば、私の生きて来た時代は、原爆と原子力の時代であった。三年前に刊行された自伝「ある原子物理学者の生涯」(新人物往来社)を、田島さんはこう結んだ。

理化学研究所の仁科芳雄研究室で核開発に関係したテーマに取り組み、終戦直後は広島・長崎の被爆地調査、原子力の平和利用時代に入ると、国の原子力委員、原子力安全委員に。立教大学教授としても、放射線物理という新しい領域を日本に根付かせた。

エピソードに事欠かない人だった。一九七三年、当時

時の森山欽司原子力委員長(科学技術庁長官、故人)の強硬路線に反発し、原子力委員を辞任。「原子力委員の職責を果たすことが困難」と、たたきつけるような辞表だった。

日本の原子力開発のあるべき道は、推進一本やりではなく、安全・環境に力点を置いた施策を検討すべきだというのが、一貫した主張であった。

その翌年に起きた原子力船「むつ」の放射線漏れによる漂流事件は、国の原子力行政の独断専行、地元無視の典型として忘れられない。漁民団体の要請で波浪にもまれる「むつ」を船内調査、青森県に帰港しても問題ないとの説明が納得を得て、事態は収拾された。

漁師の「田島先生なら信用できる」という言葉に、胸が熱くなったという。

七八年に発足した原子力安全委員会の委員に就任してから九年間、原発立地の安全確認など原子力開発

チェックの中心的役割を果たし、財団法人原子力安全研究協会理事長に転じた。五十年近い付き合いという森一久日本原子力産業会

議副会長は「時代の求めで引っぱり出されていた。ふだんは温厚ですが、基本が曲げられるとなると譲らない芯の強さを秘めていた方でした」と惜しむ。

冒頭の自伝を自ら英訳中だったが、二千数頁を残し、前立腺がんで逝った。

(大西 正夫)



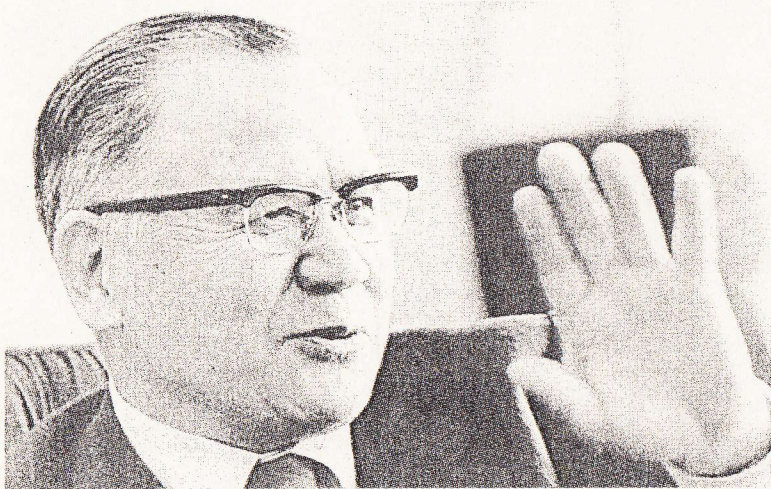
安全な原子力に情熱を注いだ田島さん(91年6月)

原子力安全研究  
協会 前理事長

田島 英三さん

10月10日死去(前立せんがん)、85歳

28日お別れの会



原子力利用で、安全性の確保を訴え続けた＝83年

強い立場にある者の横暴に、激しく怒り、立ち向かった。

一九七四年、首相の諮問機関「原子力委員会」の委員を辞任した。科学技術庁長官が、開発推進派とみられる人物を新委員にしたからだ。『安全や環境問題の専門家を加えるべきだ』との訴えを無視された憤りがあった。科技庁から留任を求める電話がかかっても、はねつけた。次第に声が大きくなる。妻の浪子さんは声が外に漏れないよう、そっと雨戸を閉めた。辞任後すぐに、原子力船「むつ」の

放射線もれが起きる。政府は安全だと説明したが、「信用できない」と考える地元・青森県の漁協から調査依頼がきた。「むつ」に乗り込み、漁民大会で「汚染の心配はない」と報告。大きな拍手が起きた。自伝「ある原子物理学者の生涯」に記している。「必死で政府に抵抗した漁民達が、私の言うことを信頼してくれたという思いに、胸がせまり目頭が熱くなった」

## 強者に立ち向かった生涯

(企画報道室 西 秀治)

お別れの会は、東京都内のホテルであった。日本原子力産業会議の森一久副会長が「チェルノブイリ原発事故の調査で現地に行ったとき、キエフ空港で窓のほこりを集め、ドナウ川の水を採った。事故があった発電所が出されたコーヒーに付けられた砂糖も持ち帰って分析した」と秘話を明かした。妻は、七年前から夫の病気を知っていた。「本人は最後まで分かっていたかどうか……。でも仕事には十分に力を注いだし、悔いはないと思います」

長く立教大学で教えた。期末試験でこんな答案があった。「先生は仏さまのように優しく、道で会うと丁寧におじぎをしてくださいます。なぜ採点が辛いのですか」。ひどい答案だったけれど、及第点をつけた。

寂しがりやで、神奈川県鎌倉市の自宅では、書斎があるのに台所で資料を広げた。病弱な妻に、仕事帰りに魚の切り身などを買ってきては「こんなに高いものを」としかられた。バラを育てるのが好きだった。

埼玉県行田市の生まれ。三十八年、原子核研究の第一人者だった仁科芳雄博士の研究室に入る。米軍の原爆投下の一カ月後には、広島と長崎で現地調査した。廃墟の中で「原子力の平和利用は必要だが、安全への配慮が絶対に必要だ」と確信する。国連科学委員会のメンバーにもなり、「米・英・ソは原水爆実験の基礎データを出すべきだ」と主張、各国のかっさいを浴びた。

入りのあめを大量に買い込んだりしていましたね」と城さん。九一年に脳こうそくで倒れてから、のどの調子を崩した。入退院を繰り返した。告別式には、北海道や九州からもファンが訪れた。静岡県に住む六十一歳の女性は「子育てや内職のかたわら、『みんなの茶の間』などにのめりこんでいました。中西さんの声は、播さぶるっていか、目を覚ましてくれるというか、もう酔っちゃう」。いまにも語りかけてきそうな遺影に、元リスナーたちが目をうるませた。(学芸部 藤崎 昭子)

放送原稿も自ら書いた。時には酒場の隅で＝84年6月



も、しんみりさせ

「オホシ」

三日月

ニイニ

男

入りのあめを大量

ていた。その遺志通愛媛県宇和島市生が深く、家業の時計九三〇年に上京。白川端康成を訪ねた。の心象風景を詩的に「時間」が雑誌に掲載。同じ年、無名だったと出会う。「遊び」れ、詩を持って訪問の一節にうなずいて「議とウマが合った」十風さんに語って「雑誌「青い花」を創「晩年」の作品は」となった。「傑作」

宝幸水  
前社長

水産業界大手のを今年六月まで務年前に直腸がんの一年一月には、ぼうがわかった。がん、ける中で、会社のし、二年前には累し、復配寸前まで不況のなかで、今営改善計画を実施に、今度は、肺が一橋大学の四年た。日立金属に就一橋大初の海外遠ス隊」のメンバー配慮で入社の方を社会人としてのときに、日本山岳遠征隊」の隊員に小西政継氏ら、優てのことだ。昭子りだというのに、参加。未登頂のの、八、〇五〇歳その後、友人の